主体的に考え，表現することができる児童の育成

～国語科「書くこと」領域の指導の充実を通して～

日置市立飯牟礼小学校

1　研究のねらい

資質・能力の３つの柱をバランスよく育成していくために，「学習者主体の授業」の実現が求められている。また，本校の学校教育目標も主体的に考える児童を育成していくことを目指している。しかし，児童の実態として，自分の思いや考えを理由まで含めて書くことや，相手や目的に応じて整理して書くことに課題があることから，国語科「書くこと」領域において，指導を充実させることを通して，主体的に考え，表現することのできる児童の育成をねらい，研究を行った。

2　研究の概要

本研究で目指す子供の姿を「自分の思いや考えを伝えるために，自ら進んで相手や目的に応じた表現方法を考え，適切に書き表すことができる姿」と捉えた。国語科「書くこと」の授業の中で目指す子供の姿が見られるよう，授業づくりや指導方法を探り，実践・検証した。

3　研究の内容

(1)　書く意欲を高めるための手立て

(2)　相手意識・目的意識をもたせるための手立て

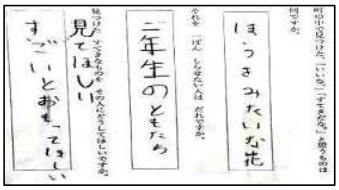
(3)　思考・判断を促すための手立て

4　研究の実際

(1)　書く意欲を高めるための手立て

ア　学ぶ必要感がもてる単元設定

児童自身が書く目的を明確にもち，自分から書いてみたいという意識をもたせる必要がある。そのために，実生活に即した，書く目的が明確な学習活動を設定する。加えて，単元の導入時に，内容・相手・目的を児童に考えさせた。



資料①　導入のワークシート

学ぶ必要感をもたせるために，過去の児童作品をモデルとして提示したり，タブレットを活用した取材等を行わせたりし，より意欲的に取り組む手立てを充実させた。

イ　自分が書いた作品等の分析・検証

前時と本時の成果物の違いを分析・検証させ，新たに加えた視点や気付き・発見などを認識させることで，意欲の持続を図った。

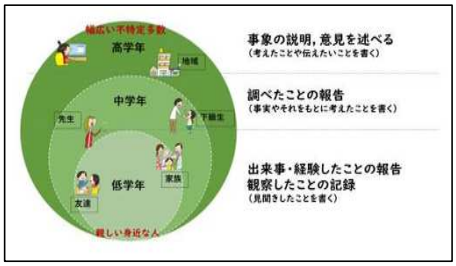
ウ　視点を明確にした振り返り

「わがとも」わ（分かったこと）が（がんばったこと）と（友達の考えを聞いて思ったこと）も（もっと知りたいこと）による４つの観点に沿った振り返りや，共有場面の設定により，自他の成長やよさ等を確認させる学習活動を設定した。また，次時の見通しをもたせたり，学びを生かす場面を考えさせたりした。

(2)　相手意識・目的意識をもたせるための手立て

発達段階に応じた相手・目的の設定,系統性を踏まえた指導

資料②の系統図は，低学年・中学年・高学年に分けた場合に，どのような対象や目的を想定できるかイメージしたものである。相手意識や目的意識をもたせ，「何のために書くのか」「何を伝えるのか」「伝えたいことの中心は何か」など，具体的に設定させる指導を行い，対象に合わせた内容や表現等をよく吟味させる必要があると考えた。



資料②　相手・目的意識の系統図

教師が発問でより具体化させたり，子供たち同士の対話活動等で具現化したりすることが有効であると考えられる。授業の中で相手や目的を意識して考える場を設定，充実させた。

(3)　思考・判断を促すための手立て

ア　思考ツールの活用による検討・整理《題材の設定，情報の収集，内容の検討》

必要な事柄を比較・分類し，伝えたいことを明確にするため，また，事柄をどの順序で書くか，他に加える言葉はないかなど対話活動で整理させるため思考ツールを活用した。

イ　モデル文の分析・検討と「文章構成カード」の活用《内容の検討・構成の検討・記述》

モデル文は，思いや考えを明確に伝えるための順序や，説明等の視点を整理させるために活用した。「文章構成カード」は，説明の順序を構想させる際に活用した。論理的に思考し，理由や根拠をもって検討することにつながった。

ウ　児童間の相互評価とその後の再構成《推敲・共有》

グループ活動等で，文章を互いに読み合い修正点に気付かせることで，考えに広がりや深まりが見られた。助言や気付きを推敲に生かしたり，作品の共有でよさに気付いたりすることができた。

5　研究のまとめ

(1)　成果

○　「自分から書きたい」という意欲が高まった姿が見られた。
○　振り返りにおいて自分のよさや学んだよさを実感する姿が見られた。
○　相手・目的を明確化し，書きたいことを焦点化する姿が見られた。
○　内容を整理し，相手に伝わる表現の仕方を検討する姿が見られた。
○　自分の思いや相手の興味・関心を踏まえた事柄を選択する姿が見られた。
○　友達との学習による気付きから，考えに広がりや深まりが出る姿が見られた。

(2)　課題

●　書くこと，書く順序，理由，根拠などが思い浮かばない児童への働きかけを充実させる必要がある。
●　相手や目的に応じた書き表し方の指導を充実させる必要がある。
●　児童の考えの共有の在り方と修正方法の指導を充実させる必要がある。

6　今後の取組

授業づくりや新聞投稿などを通して，子供たちの意識の変化が見られた。来年度はこれまでの実践を引き継ぎ，今年度の研究の課題解決を図りたい。また，他領域，他教科の学力向上につながる効果的な手立てを検討していきたい。